

図書館評価法の変遷と特徴

The evolution and characteristics of library evaluation methods

学籍番号：201821603

氏名：五十嵐 智哉

Igarashi Tomoya

図書館評価は図書館経営において欠かすことのできないものである。急速な社会状況の変化を背景に、図書館においても評価がさらに求められるようになってきており、その重要性は高まっている。しかしながら、これまで、どのような図書館評価法が考えられ、使用されてきたかについて詳細に明らかにした研究はみられない。

そこで本研究は、これまでの図書館評価の手法の変遷と特徴について理論と事例の両面から体系的に明らかにすることを目的として、図書館経営の教科書と代表的な図書館評価手法である、「パフォーマンス指標」「費用便益分析と投資収益率」「バランス・スコアカード」「LibQUAL+」「インパクト評価」に関する文献の分析を行った。

その結果、図書館評価法の変遷について、図書館内部の視点からの評価から利用者の視点からの評価へ発展してきたことが明らかとなった。また、量的なデータだけでなく、質的なデータを使用した評価手法も今後さらに重要となっていくことを示した。図書館評価法の特徴としては、図書館員の知識とコストが重要な要素としてあげられた。コストには、金銭的なコストだけではなく人的資源のコストも含まれていた。多様化する図書館サービスのあらゆる側面を評価するために評価手法は複雑化しており、適切な評価をするためには、評価手法やデータの分析と解釈の際に専門的な知識やスキルが必要となってきた。つまり、今後は、評価を行う図書館員にとって、評価のための専門的な知識やスキルを身に着けることが必要となっていくと考えられる。また、図書館評価のためにはコストがかかる。そして、コストがかかるということは、それに見合った見返りが要求される。そのため、図書館評価の手法を提案する専門家の視点では、提案の際に、評価による見返し、言い換えれば、評価を行うことによる効果についての説明も求められるようになっていくと推察される。

本研究の成果は、今後の図書館評価に関する議論や新しい評価指標の検討の際の基盤になる。

研究指導教員：逸村 裕

副研究指導教員：小泉 公乃